

野間宏全集

第十六卷

野間宏全集

第十六卷

筑摩書房

野間宏全集 第十六卷

一九七〇年十一月十四日第一刷発行

著 者 野間宏

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一(代表)
郵便番号一〇二―一九一
振替東京四二二三

本文印刷 暁印刷株式会社
製本 和田製本工業株式会社

目次

I

国民文学について

日本人の文学要求

文学における普遍性と具体性

新しい文学の方向

国民文学の問題にふれつつ

各階層の自覚の仕方のちがい

民族文学・文化について

竹内好著『国民文学論』について

モラル企業

社会変革と文学

日本における「抵抗」

政治と文学

真実追求の文学

政治と文化について

大衆文学について

出版と文学

Ⅱ

実践と創作の環

労働者の文学意識

労働者文学の問題

言葉に対する愛を

書斎をもたぬ人たち

労働者の文学の問題

欲望とレアリズム

働くものの文学

文学創造の条件

趣味的サークルからの脱皮

部落解放運動のなかの文学の前進

部落における文化運動

底からわき上ってくる……

部落解放運動と『破戒』

未解放部落の人々

部落の表現力

すさまじい真実

趙基天著『白頭山』

Ⅲ

文学サークルの詩

民衆詩人の誕生

詩人集団について

詩の体験の質

日本の抵抗文学

詩誌『列島』発刊について

新しい詩論

文学要求

詩を読む運動

労働者の詩について

『いくつかの疑問』を読んで

無名詩集『京浜の虹』と『祖国の砂』

銀行員の詩集

新しいたたかいの詩

日本学生詩集

日本抵抗詩集

『石ころの歌える』

Ⅳ

小説を書く作業

小説を書く技法と態度

『革命工場』を読んで

新しい通俗文芸について

労働者文学の構想力

『鉄路のひびき』について

人物の創造

『生きる』の誕生

「ささやかなる抵抗」について

「ゾーッとする話」をめぐる論争

「歪められた原色」について

すべての美しさと醜さをおおいかくすことなく

「教師の文学」について

「御璽」の問題と教師の文芸について

労働者文学への期待

広島とエスポワール

組織者と創造者の統一

『アマゾン』について

創作批評（I）——『新人文学』の作品

創作批評（Ⅰ）——『新日本文学』誌上文学学校

V

小説と生活記録

日記文学と私たちの日記

「ありのままにかく」ということについて

新しい記録運動

文学のひろがり

日本人の真実追求の力

『傷は癒えたか』を読んで

『喜びも苦しみも』

生活記録運動の新しい前進の時期

「生活記録」選評——『新潟日報』所載

VI

人類意識の発生

人類の立場

一条の光線

荒正人の問いの前に立って

照りかがやく光

一九五一年以後の統一の問題

人間回復の条件としての変革

近代主義批判以後

〈対談〉日本共産党の中の二十年

解説

へききて 白井吉見

玉井五一

661 637 630 619 612 608 598 594

国民の文学

国民文学について

一

「国民文学」についてのいろいろの主張、意見論議が出されている。八月号の雑誌をみても竹内好氏が「国民文学の問題点」(『改造』)を明らかにしており、伊藤整氏、白井吉見氏、折口信夫氏、竹内好氏の四人が「国民文学の方向」(『群像』)を座談会で論じている。しかしこのような論説をひき起こす原因になった、「新しき国民文学への道」と題した竹内好、伊藤整両氏の「往復書簡」(『読書新聞』)、そのほかこの問題にふれた他の文章などもふくめて、これらはまだ国民文学についての正しい展望を打ちだすことができたとはいえない。勿論私たちはこれらの論議が国民文学について否定的な疑問を提出している白井吉見氏のものであると、ただちにその内容の如何をとわず価値なきものなどと考えているわけではない。竹内好氏も言っているように、「国民文学論の前進のために、今日の段階で議論の整理をこころみる」ということは必要なことであり、これ

らの試みがその整理に役立っていることを私たちも認めるからである。……「この場合整理は一つの方法である。建設的な意見を出す方が好ましいわけだが、私に力がないという理由だけでなしに、今日の段階ではまだ無理のようだ。問題に近づく方法として整理によるのが規則である。国民文学はそのものとして存在しないし、イメージをえがくことさえも十分こころみられていない。提唱が有効であるかどうかの議論も十分にはなされていない。国民文学という用語はだんだんに普及する傾向があるが、概念規定はアイマイである。日本文学の現状に批判的な見方をする人が、それぞれの立場、文学観の上に立って、現状否定の意味で反対概念として国民文学というコトバを使っているだけである。整理の必要なユエンだ」(『改造』)と竹内好氏は言っているが、この竹内氏の意見は大体現在の国民文学論の現状をとらえているといつてよいと思う。しかしはたしてこれらの論議は国民文学論の正しい整理することに成功しているであろうか。

竹内好氏が日本の文壇の文学が国民生活からはなれてしまっていること、日本再建になんら責任をもとうとしていないこと、それはむしろ日本国民の道徳の荒廃の上にさかえている文学であるという指摘をしたのは、昨年の六月『世界』のことであるが、それは白井吉見氏が「山びこ学

校」の少年たちの作文から受けた感動と文壇文学から受ける無感動について比較して書いた文章に示唆をうけている。「文壇小説はおそらくこれら少年たちの思考とは逆な方向をたどっている。国民生活の広さとむすびつくことを避けるところで成立している。いわゆる中間小説と文芸雑誌、綜合雑誌の小説を区別する一線などどこにも存在しない。ありとすれば掲載雑誌の区別が、それに応ずる作者の世俗的用心の使いわけぐらいであろう」と臼井氏はそのとき書いた。そして竹内氏は「もしいまの場合日本民族の滅亡がかけられているとしたらそれでも文学は局外中立を保てるだろうか」とはげしい調子でかいたのである。

竹内氏のだした問題というのは日本民族の危機にあたつて日本の文学者ははたしてどのようにすべきか、その課題は何かという問題であつた。「読者の要求は素朴であるが、素朴なだけに職業作家のように文学の本質を見失うことはない。かれらは待っている。期待をかけて辛抱強く待っている。失望しながらも、失望しきりになることはない。かれらは『魂の教師』の出現を待っているのだ。自身のモラルをふまえて両足で大地に立ちたいというやみがたい願望にかられてじつと待っている。文学者は文学に魂の教師を期待する読者の要求は甘いという。それは古風であり、現代的でないという。しかし読者の要求はつねにそうしたも

のだ。そして私は読者が甘いか文学者が甘いかは疑問だと思ふ」と竹内好氏はいい、また次のようにも言っている。

「国がほろびるときには文学者はただ亡国の歌をうたえればいい。かれはただ満腔の熱情をこめてそれをうたえたい。しかしいまからそれをはじめるのは少し早すぎはしないかと私は思う。」このように竹内好氏が国民文学（まだ国民文学という名をつかつてはいないが、その求めているのは国民文学である）の問題をだしたのは、日本民族が滅亡するか否かという民族の危機を深く自覚する立場にたつてである。そこにたつて国を再建する、否新しい国をつくりあげようとする多くの人々の魂の願いをはっきりと感じ取つたのである。民族の危機の自覚の上にたつてその国の文学を考へるといふこと、このことは自然なことであり、また文学者としてじつに正しいことである。そして私たちが国民文学を考へるのも、このところからである。これをはなれていかに国民文学を考へようと、これは現在の日本からはなれて日本文学を考へるようなものであり、「魂の教師」を求めて待っている多くの人たちからきりはなされてしまふことである。それでは現在非難の対象になっている日本の文学となんらかわりのないところにおちこむはかはない。わたしたちは日本文学の危機の自覚の上にたつた竹内好氏の出発点をそのままとめなければならぬ。しかし竹内

氏がその出発点から出発して国民文学を考えて行くにあたって示した二つの注意をみると、私たちは竹内氏の考え方によってほんとうに国民文学というものを考ええることができるだろうかという疑問をいだくのである。その二つの注意というのは、竹内氏自身のこのような国民文学の要望にたいして、文学者の側からでるにちがいないと予想される反論について、出されたものである。文学者の側からの反論がないわけではないとして、竹内氏は文学にそのような期待をかけるのはまちがっているという文学者側の反論をまず第一に予想し、この反論は文学を直接の功利性に結びつけることに對する強い嫌惡の感情が元になってでてくるものと考えられるとしている。そして竹内氏は次のように考えるのである。「これは近代文学を経過した以上は当然というべき一面の妥当性をもっている。文学が權力なり觀念なりへの奉仕を要求された場合に、自身の自律性に立つて反撥するなら、それは有効に働いたことになる。一切の御用文学は拒否しなければならぬ。しかし、もしいまの場合、日本民族の滅亡がかけられているとしたら、それでも文学は局外中立を保てるだろうか。いかに純粹な文学でも民族とともに生き、ともに滅びる。道德の荒廢は、インフレーションのようなもので、見かけの好景氣は信用できない。道德の荒廢の上にさかえる文学は、蓄積を浪費

しているだけであつて、いつかは縮少再生産によって自身が消滅するにきまつている。文学の自律性とはそんなものではないはずだ。」つづいて竹内氏は第二の反論が文学に功利性を認める立場から發せられるだろうと考え、その反論というものは「文学は國民的要求に答えるべきだし、またある部分ではそれに答えているというものになるだろう」としている。そしてこの場合に対して竹内氏は、「その答えているという部分がじつは答えていないのではないかと思われる。」というのは、そのために自律性をギセイにしているからだ。読者が文学に求めるものは慰めであり、力であり、したがってその元をなす眞実であるが、その眞実は表現によつて昇華された眞実であつて、ナマの行爲ではない。読者は直接の功利性を文学に期待しているわけではない。文学的眞實を實現できないために外から思想なり觀念なりを借りてきたのでは、読者を満足させることはできない。なぜなら、それは道德の荒廢の上にさかえる文学を内から倒す力になりえないからだ。それは修身科を設けようとする企てと変らない。空腹感を水でまぎらすようなものだ。したがつて主觀的意圖の善惡にかかわらず結果として文学のダラクに協力していることにおいて第一の立場と変らない。」このように竹内氏が出した二つの注意の第一は、いわば文学主義、芸術主義ともいふべきものなどの